
Love is blind

藍澤青華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L o v e i s b l i n d

【Nコード】

N2017BA

【作者名】

藍澤青華

【あらすじ】

魔法が存在する世界で神子が存在する星で、
快活でお転婆な主人公と神子のお話。

別サイトで挿絵つきの話が読めます。

話の内容はここでアップしているものと同じものです。

Act・1

厚い雲に暗い空。

まるでこの国を表したかのような闇に映える純白の城。

城内の広間に入りきれないほどの兵士で溢れかえっている。

兵士たちの熱気は凄まじく、一人の男の名を呼んでいた。

「ケトちゃん、はい いつもものね!」

「ありがとう!いつも助かるわ!」

ケトは店で買い物袋を受け取ると、不思議そうにドアの窓から街を見回す。

私のよく来る城下町はとても活気にあふれ、笑顔が絶えない所だ。しかし、今日は何だかそわそわと落ち着かないような、喜びを押しさえつけているような、そんなふわふわとした空気が街を包んでいる。

「……おじさん 今日は何かあるの?」

「ケトちゃん、本気で言ってるのかい?」

ケトが不思議そうな顔をしているのを横目のため息をつき、

「我が国の勝利を祝ってるんだよ」

「勝利……って大変!……!」

「ああ、早く帰った方がいい 忙しくなるぞ」

この国は世界で今一番勢力を持っていることだろう。

世界は国の領地を広げ、自国の力を強くしようと日々領地争いを繰り返している。

そして今一番頂点に近いこの国は、軍事力もさることながらもう一つ突出しているものがある。

それは神子の存在だ。

神子とは、魔法を使うことが出来る能力者のことである。

神子は国に一人は必ずおり、神子と軍事力は比例するらしい。

「 医院長！！大変！大変です！！！」

「 まあまあ、そんな慌てて・・・」

私、ケトは2年前から城にほど近い小さな個人病院で見習いとして働いている。

私の家自体は裕福だった。何不自由ない生活をしていた。

しかし、父が病気で倒れてからはとても大変だったのを記憶している。

会社を経営している父の不在は私の家族にまで影響を及ぼしたのだ。

いまは全快したので、笑い話にはなっているが。

そして父を治療したのがこの病院長だった。

多大な感謝とともに、自分も誰かのためにそうなれたらと思ったのがきっかけだった。

そして見習いではあるが、私の左胸には医療従事者がつけるバッジが光っている。

これは私の夢の第一歩なのだ。

「そうですね、勝利したんですね・・・。」

「準備しますか？」

「そうですね、なるべく沢山の負傷者を受け入れられるようにしてください。」

「はい！」

この国の勝利は確かに喜ばしいことなのかもしれない。勝利を得た国の平和は少し保たれることになるのだから。

しかし、戦争で得られるものは勝ち負けだけではない。

たとえ勝利を得たとしても、この国を守るために戦った兵士たちの傷跡は残る。

肉体にも、心にも。

負傷した兵士たちは各地の病院に搬送され、一時的な応急処置を受け、入院が必要な者は大病院へと送られる。

病院に収まりきらないほどの兵士たちをみると、私はやりきれない気持ちになるのだ。

戦争なんて無くなってしまえばいい

と。

「ケトさん、新しい布を持ってきてください！大量に！！」

「はい！！」

今回も変わらぬの大勢の兵士たちが搬送されてきたため、病院は大忙しだった。

そしてケトは、急いで倉庫に新しい布を取りに行く途中で蹲る男を見つけた。

「・・・どうしたの？大丈夫??」

思わず声をかけたものの返事はない。

覗き込むと、足首を負傷したようで血がにじんでいた。

「・・・大変！手当てしなきゃ！」

肩に腕を回し、引きずるようにして病院に戻り手早く治療をする。幸い傷が深くなかったようで、簡単なもので済んだ。

ケトがほっとして顔をあげると、男はじつとを見つめてからつぶやいた。

「・・・ありがとう、本当に助かりました。」

「あ、しゃべれたのね！」

「はあ、まあ・・・。」

「しっかしお兄さんいい声ね！セクシーボイス！！」

「・・・。」

おもむろに男は俯き、肩を震わせたかと思うと笑い出した。

笑い出して止まらない男にきよとんとした顔のケト。

「ありがとう、嬉しいよ」

そして男は笑った。満開の笑顔で。

これが私と彼の出会いだ。

今でも時々考える　もしこの出会いがなければどうなっていたのかと。

ねえ、貴方はどう思う？

笑って出会えて良かったと言ってくれるかな？

それとも・・・。

A c t . 1 (後書き)

初めまして。

連載始めました。

良ければ読んでやってください。

そんなに長い間生きてた訳じゃないけど、最近感じるんだ。
縁って本当に存在するってこと。

もう二度と会うことがないかもしれない、そうなることが当たり前のように感じてても次の日にはったり会うことだってある。

それってつまり運命なのかな？

だとしたら、ぞうきを絞っただろう灰色の水を頭からかぶって目の前にいる、昨日会った男の人ともそうなのかしら？

「声は相変わらずセクシーだから大丈夫!!」

「何のフォーローにもなっていないよ……」

今日も街に買い物に出かけていた私はお目当ての物を見つけて帰る途中だった。

大通りを歩いていた私の横のドアから見覚えのある男の人が出てきた。

昨日、足の手当てをした人だと思い当たり嬉しくなって声をかけようとしたその時だった。

上の階の女性がバケツの水を捨て、それが男の人の

。「まあまあ、大変だったわねえ。」

今はまだ冬。さすがに風邪を引いてしまうので、この病院の控室に連れて帰ってきた。

院長は彼の姿を見るなり、動じることなく風呂を勧め彼に温かい飲み物を差し出した。

私は、小さくなる彼を見つめて少し笑ってしまった。

彼はそんな私を横目で睨みながら、

「……凄く臭かった……。」
思い出したのだろう、眉間にしわを寄せて不機嫌そうにつばやいた。

「ねずみ色だったもんねえ〜」
「まあまあ、ケトさん。それで……ええと……?」
院長は目でお茶菓子と私たちのお茶を用意するよう伝えた。
しぶしぶ席を立ち、用意をする。

なかなかあんな美形に会えることなんてないから、もう少し話したかったのに……!!
院長のいじわる〜〜。

「ああ、申し遅れました。私はレナイ、レナイ・フィーレントと申します。レナイと呼んでください。」

「レナイさん、ですね。レナイさんはどこかへお出かけになる最中だったのでしょうか?大丈夫なのかしら?」

「ええ、済んだ後だったので不幸中の幸いでした。」

「そう、良かったわ」

「……ありがとうございます。」

あれ?

そう思って彼を見るけれど、院長と彼の間には流れる柔らかな空気に何ら変化はない。

外の柔らかい光が彼の髪を照らして透き通るように美しかった。
私の視線を感じて彼は小さく笑ってくれたけど……。

どうして?

どうしてそんなに泣きそうなの……?

A c t . 2 (後書き)

ああ・・・一番書きたい人がまだまだ出番待ち・・・です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2017ba/>

Love is blind

2012年1月9日16時48分発行